

茨城県坂東市（国内 76 例目）の高病原性鳥インフルエンザ発生農場に係る
疫学調査チームの現地調査概要

令和 5 年 2 月 11 日に実施した現地調査により、以下のことを確認した。

1 農場の周辺環境・農場概況

- ① 当該農場周囲には田畑と林、工場、ソーラーパネルがあり、産業廃棄物置き場に隣接している。
- ② 発生農場西側を流れる、幅 2～3m の川ではカモ類を確認できず、農場の北西側におよそ 2km 離れたゴルフ場の池で、マガモ、カルガモ、コガモがそれぞれ数十羽確認された。
- ③ 当該農場はウインドレス鶏舎 10 棟（育成舎 2 棟、成鶏舎 8 棟）からなり、発生時は空舎の 1 棟を除き、1 鶏舎当たり約 13 万羽の採卵鶏が飼養されていた。発生鶏舎は成鶏舎 2 棟で、背中合わせの直立 8 段ケージが 6 列あり、1 ケージ当たりの飼養羽数は約 22 羽であった。

2 通報までの経緯

- ① 飼養管理者によると、各発生鶏舎での 1 日の平均死亡羽数は 15 羽から多くとも 20 羽程度であり、1 ケージで複数羽の死亡はなかったが、2 月 9 日の午前中に鶏舎の見回りを行ったところ、成鶏舎 2 棟で、いずれも 1 ケージに 4 羽の死亡が確認されたとのこと。農場のマニュアルでは、1 ケージで 2 羽以上死亡した場合は鳥インフルエンザの自主検査をすることとしており、簡易検査を実施したところ 2 鶏舎ともに陽性であったことから、家畜保健衛生所へ通報したとのこと。
- ② 発生が確認されたケージは、2 鶏舎とも舎内の中央付近にあり、それぞれ最下段と上から 2 段目に位置していた。
- ③ 調査時には、一方の発生鶏舎では、初発ケージ以外に死亡鶏や衰弱鶏は認められなかった。もう一方の鶏舎では、初発ケージの他、隣接するケージでも死亡鶏が認められた。それ以外の飼養鶏に異状は認められなかった。

3 管理人及び従業員

- ① 農場によると、当該農場では約 68 名の従業員のうち約 23 名が成鶏舎、約 13 名が育成舎の管理を担当しており、その他の従業員は集卵作業、鶏糞乾化作業等に従事していた。成鶏舎と育成舎の担当者は分かれており、農場へ入場する更衣室も分かれているとのこと。廃鶏出荷時には育成舎担当者も出荷作業に従事することがあるが、その場合、その者は担当の育成舎には立ち入らず、自宅へ直帰させるとのこと。
- ② 成鶏担当の担当鶏舎は固定されておらず、当日の出勤者の中で、日々の担当鶏舎が割り振られていたとのこと。なお、鶏舎内作業担当者と集卵担当・鶏糞関係担当者は完全に分けられており、鶏舎内作業担当者以外の従業員が鶏舎内に立入ることはないとのこと。

4 農場の飼養衛生管理

- ① 農場によると、従業員が農場に入る際には、駐車場に隣接したワンウェイ構造の更衣室で場内専用の作業着・長靴への着替え、手指消毒を実施し、踏込消毒槽を通過した上で農場内に入場していた。鶏舎作業担当従業員が鶏舎に入る際には、さらに鶏舎入口のワンウェイ構造の更衣室で鶏舎専用の作業着・長靴への着替え、手指消毒、手袋の着用を実施しているとのこと。作業着は、汚れが付いた場合及び 2 時間ごとの休憩時に交換しているとのこと。
- ② 農場内に立ち入る外来者には、2 週間養鶏場に立ち入っていないことを確認し、畜

産関係者の場合には来場前に入浴してくるよう指示しているとのこと。その上で、鶏舎に入る際は、来場者用更衣室にてシャワーを浴びてから、農場内専用作業着と長靴の着用を行い、手指消毒を行い衛生管理区域に立入るとのこと。鶏舎に立入らない飼料配送担当者等については、車両消毒ゲート脇のプレハブにて農場内専用作業着と長靴の着用を行い、手指消毒と踏込消毒を行い、運搬車両への場内専用フロアマットの設置を行なった上で衛生管理区域に入場しているとのこと。

- ③ 車両出入口は農場入口の1か所のみであり、日中は守衛が車両の出入りを管理、夜間は施錠しているとのこと。また、出入りする全ての車両について、設置された消毒ゲートで上下左右から車両消毒を実施しているとのこと。
- ④ 踏込消毒槽（アストップ1000倍）は1日2回以上交換しているとのこと。
- ⑤ 鶏舎の換気について、夏は鶏舎前面の入気口と奥側の排気ファンによるトンネル換気、冬は前面のパネルは閉鎖し、外気温に応じて自動で開閉するインレットを通じた天井からの入気と排気ファンで行なわれている。調査時には発生鶏舎では3～4台のファンが稼働していた。
- ⑥ 鶏舎構造は屋根裏のあるモニター構造であり、モニター部入気口には金網が張られ、その外側から不織布のフィルターを張っているとのこと。屋根裏は鶏舎単位のオールアウト時に洗浄しているとのこと。
- ⑦ 糞乾装置について、夏は外から入気しているが、現在は外側をパネルで覆って塞いでおり、鶏舎内から入気しているとのこと。
- ⑧ 成鶏舎の鶏糞はベルトコンベアで直接堆肥舎へ搬送され、コンポストで発酵後、二次発酵棟へ搬送されるとのこと。完熟堆肥は袋詰め又はフレコン詰めされ出荷されるとのこと。
- ⑨ 午前中の健康観察時に確認した死亡鶏は、ペール缶に集められ、除糞ベルトを稼働する際にベルトに落として鶏糞と一緒に回収し、直ちにコンポストに投入しているとのこと。
- ⑩ 育成舎の雛を120日齢で成鶏舎に移動する際に、育成舎の従業員が成鶏舎に立入ることはないとのこと。また、移動に使用した車両やケージは場内に設置された動力噴霧器で消毒してから育成舎エリアに戻しているとのこと。
- ⑪ 当該農場では鶏舎単位でのオールインオールアウトを実施しており、空舎期間を20日程度設けているとのこと。直近の廃鶏出荷（約700日齢）は2号舎からで、2月4日から4日間で行われたとのこと。出荷の際には、移動用ラックに出荷鶏を搭載して1km先の出荷場へ搬出し、ラックは洗浄・消毒してから農場へ持ち帰るとのこと。出荷期間中、出荷場で作業する従業員は固定し、出荷場で作業している従業員が農場に立入ることがないようにしているとのこと。
- ⑫ 飼料タンクには蓋があり、防鳥ワイヤーが張られていた。飼料の補充はほぼ毎日され、作業は夜間に実施されるとのこと。
- ⑬ バーコンベアはすべて建屋の中を通り、屋外に開放している箇所はなかった。
- ⑭ 農場内に持ち込まれる備品等は、消毒ゲート前のプレハブでホルマリン燻蒸しているとのこと。

5 野鳥・野生動物対策

- ① 農場によると、ネズミ対策として粘着シートと殺鼠剤を設置しており、農場全体で1か月に10匹程度のハツカネズミが捕らえられるが、日常的にラットサインは見かけないとのこと。調査時もラットサインは確認されなかった。
- ② 鶏舎に野生動物が侵入可能な間隙は確認されなかった。
- ③ 農場内には以前はネコが侵入していたが、農場周囲をフェンスで囲み、フェンス下部をスレートで塞ぎ、上部は有刺鉄線と電柵を追加したところ、これらの動物の侵入はなくなったとのこと。フェンスの破損や通電は毎日確認しており、フェンス下部に動物が穴を掘った跡なども見られないとのこと。

- ④ 農場敷地に隣接する林でカラスをよく見かけ、30羽程度が朝夕日常的に農場上空を通過するとのこと。カラス対策のために、機械棟の屋根にレーザーによる鳥類忌避装置が設置されていた。調査時には、ハシボソガラスやハシブトガラス数羽、ハクセキレイ、ヒヨドリ、キジバト等の野鳥が農場内で確認された。

(以上)